

低出生体重児をもつ母親における退院後の 育児不安内容に関する文献検討

○林実歩香, 松浦菜奈(赤穂市), 藤井可苗(関西福祉大学)

I. はじめに

厚生労働省によると、わが国では、2020年の総出生数は約84万人と年々減少傾向にあるが、総出生数に対する低出生体重児割合は、1980年の5.2%に対し2005年は9.5%と約2倍に増加している。低出生体重児の生存率の向上がみられるが、低出生体重児を出産した母親は児の発育や障害に対する不安が普通体重児の母親より強い傾向にあるとされている(山口ら,2009)。また、低出生体重児は虐待のハイリスク要因ともされている。

そこで、低出生体重児を持つ母親が退院後に感じる育児不安の内容に関して国内の文献を用いて明らかにし、必要な支援を検討することを研究目的とした。

II. 研究方法

医学中央雑誌 web 版(Version5)を用いて文献検討を行った。キーワードは「低出生体重児」「育児不安」で検索し、原著論文に限り、過去年数は制限をかけなかった。

2021年5月27日時点で低出生体重児5129件、育児不安1200件、and検索をかけ63件が抽出された。この63件の中で、研究目的と一致しないものを除き、14件が抽出された。

III. 結果

本研究の結果、低出生体重児をもつ母親の特徴的な育児不安として、児の健康については「予防接種について」「未熟児網膜症」「今後の子どものことへの不安」、母親に関しては「超低出生体重児だったことで育児にかなり気を遣っていた」が挙げられていた。このように、低出生体重児をもつ母親の育児不安で特徴的なものもあったが、普通体重児を持つ母親の育児不安と比べ、同じような悩みが多いことも明らかになった。

また、退院直後は授乳や排泄に関する不安が多く、健康や睡眠については、退院直後から継続して多く挙がっていた。

IV. 考察

低出生体重児に特徴的な不安に対しては、出生月齢で予防接種を行う必要性や安全性、未熟児網膜症は早期から適切な管理を行うことで重症化を防げること等、支援者が正しい知識を持ち、情報提供をしていく必要がある。また、低出生体重児を育てる中での育児不安は特別なものばかりではないため、母親が小さく生まれたことを過度に気にせず育児を行うことも重要だと考える。そして、支援者も低出生体重児とその母親に対して、普通体重児に行うのと同じようにアセスメントや悩みの傾聴、フィードバックを行っていく必要があると考えた。また、入院中は病院で授乳や排泄等についてしっかりと知識や技術の提供を行うことや、退院後は1週間から1か月以内の早期に訪問を行うことで育児不安の軽減に繋がれると考えた。

V. 文献

山口咲奈枝,他.(2009).低出生体重児をもつ母親と成熟児をもつ母親の育児不安の比較 児の退院時および退院後1ヵ月時の調査.母性衛生,50(2),318-324.